

日米の国際化と

言語相対性

「部分志向の英語, 全体志向の日本語」

福田英一
福田雄二

著



● 葦書房

日米の国際化と言語相対性

部分志向の英語，全体志向の日本語

福田 英 一
福田 雄 二

葦 書 房

H0
J107

139186

ふくだ えいいち)

久留米市に生まれる。

- 1969年 福岡県立明善高等学校卒業。
1973年 九州大学工学部応用原子核工学科卒業。
1975年 同大学院修士課程修了。
同 年 東洋エンジニアリング(株)原子力開発部勤務。
1976年 カナダの Waterloo 大学工学部化学工学科博士課程へ留学。Ph. D.(工学博士号)取得。
1980年 カナダ・アルバータ州の Syncrude 社研究開発部にて、オイル・サンド開発に従事。
1986年 カナダの Western Ontario 大学経営学部へ入学、M. B. A. (経営学修士号)取得。
1989年 カナダの Hatch Associates Ltd.に、Senior Engineer として従事し、今日に至る。

福田雄二 (ふくだ ゆうじ)

- 1951年 福岡県久留米市に福田英一の双生兄弟として生まれる。
1969年 福岡県立明善高等学校卒業。
1973年 九州大学工学部機械工学科卒業。
1975年 同大学院修士課程修了。
同 年 プリヂストン(株)海洋商品設計部勤務。
1981年 カナダ・アルバータ州のエッソ石油社で Engineer として、自動プロセス・コントロールに従事。
同 年 兄：英一と共に、会社勤務の傍ら、A U (英雄) Consulting 社設立しセミナー等実施。
1986年 九州松下電器(株)に勤務し、今日に至る。

日米の国際化と言語相対性

部分志向の英語、全体志向の日本語

1990年 6月25日 初版第1刷印刷

1990年 6月30日 初版第1刷発行

著 者 福 田 英 一
福 田 雄 二

発行者 久 本 三 多

発行所 葦書房有限会社

福岡市中央区赤坂3丁目1番2号(〒810)

電話092(761)2895/振替福岡 1-39430

印刷製本 栄光印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。 0080-9026-0135

落丁、乱丁本はおとりかえ致します。

まえがき

明治開国以来、約120年が経過した。120年と言っても、その長さは人間の一生より少し長い程度で、人類の歴史と比べたら微々たるものである。その短い間に、色々な出来事が日本と外国の間に起きた。今日の国際政治・経済・社会問題は、以前にも増して複雑さを呈している。政治の世界では、米ソ2極構造から多極構造へ、経済の世界では、米国1極構造から日米欧の3極構造、更には日米欧亜の4極構造へと、再構築(restructuring)が進行している。

社会全般では、それらに伴い、取り分け東西間の異民族(人)・異文化(情報)の交流が急増している。そこでは自ずと、政治的・体制的国境、経済的国境、文化的・民族的国境が薄れる。各国間の相互依存という「目に見えない絆」による関係・結束が強まるからである。1989年11月、東西ベルリンの壁が取り払われた。正に政治的国境が形骸化された事実は、感動的であり、時代を象徴する事件でもあった。しかし、かかる激動の時代に、各国間の摩擦も増える。現に、欧米では保護貿易・ブロック化に走り、貿易規制・制裁措置が講じられている。政治レベルでは、対日不信・憎悪的発言が公然となされ、民間レベルでは、差別や果ては殺人事件すら起こった事もある。このような摩擦を異文化の「誤解」に因ると言うが、それ以前の「無知」、更には「無関心(ignorance)」の方が現実を言い当てている。

21世紀は、異文化に対し、無関心な接触で済む時代ではない。異文化を真に理解する事により、自他を相対的にそして客観的に見る目を持たなければならない。この点は、明治開国時点から徐々に認識されてきた。急速に世界が小さくなりつつある今日では、当然予

測される事である。世界が成熟した大人になる為には、自他の文化を相対的に見、多くの国際問題の根源である無知をなくさなければならない。どのような社会も、他の社会に対して、もはや相対的にしか存在し得ない。従って、社会の最大の敵は、自己の内部に潜む無知無関心である事を改めて認識しなければならない。同様の教訓は、ローマ帝国の滅亡、英国病、米ソの威信低下等の歴史から学べる。経済大国となった日本は、二の舞はともかく、三の舞を演じないように、自戒が求められる。

では、自他の文化を真に理解するとは、一体具体的に「何」を理解すればよいのか？ 過去に多くの人が、当テーマに挑んできた。しかし、それらの多くは歴史、宗教、民族性等に視点を当てつつも、断片的・皮相的に終わりがちであった。日加での在住経験を有する著者等は、エンジニアとしての仕事柄、日本的経営法に興味を持ち、1981年から研究と実践と思索を重ねてきた。その研究範囲は経営学に留まらず、必然的に宗教学・哲学・言語学・経済学・物理学等にまで及んだ。そして、1983年、著者等なりに当テーマの根源的・包括的一般解に辿り着いた。それを一言で表わすと「言語概念」である。それをベースに「言語モデル」を構築し、日米の文化と日米の言語概念との相似則実証を試みた。この結論は、図らずも；

(1) ウォーフの言語的相対性論

(2) 「言葉は文化也」や「初めに言葉ありき」(広義に解釈) の意義

を裏付ける事になった。

ここで、本書の主題・副題について注釈を加えたい。「国際化」という言葉は、定義が曖昧^{あいまい}な上、食傷気味故、いささか気が引けるものの、敢て主題に掲げた。「国際化」の意義と取り組みについては、第3章で議論する。又、英語対日本語の対照的な概念を副題とすべ

く、的確な表現を探究したが、残念ながら思い付かない。英語では、アーサー・ケスラーの『Janus』という本で用いられた、reductionism 対 holism が最も近い。日本語では、故安岡正篤の『東洋倫理概論』や『東洋政治哲学』の中での、宇宙の造化作用の分化発現と統一含蓄の対比が適切である。又、中根千枝の『Japanese Society』でのインド社会と日本社会の比較、属性 (Attributes) 志向対関係 (Relations) 志向も、英語と日本語の対比の一つである。この対比も前記の対比と深く繋がり、切り離して考えられない。以上の三つの対比表現と比べれば、部分志向対全体志向は判り易い反面、本質を正確には伝えていない。しかし、敢て「部分志向対全体志向」を本書の副題として掲げた。

著者等は、国際化が不可避の21世紀の若い世代だけではなく、現在既に国際的な舞台で活躍されている方々に、必読書としてお勧めする。本書中の文責は全て、著者等にある事を明記しておく。更に、著者等が本書中で提唱する仮説が妥当か否かは、他の仮説の挑戦を受けながら時間の試練を待たねばならない。著者等の研究から生まれた本書中の「言語モデル」と考察は、結論としてよりは、むしろ読者の新しい発想や創造を刺激鼓舞する材料として利用して頂きたい。本書は、著者等の「思索の旅」の中継点に過ぎない。

本書の第一章は、「言語と思考」及び「言語と文化」の概論で始まる。更に、英語と日本語の文法や構造等を、詳細に比較する。第二章では、「言語と思考」、「言語と経営法」、そして「言語と文化」の相関関係を日米間で議論する。第三章では、まとめとして、単一の概念に縛られる事なく複数の概念を理解し、より幅広い視野・識見を養う事が、21世紀に於ける成功の鍵である点を強調する。尚、本書の要約を、英語で小論文『Language: A New Dimension of Maragement』に著わした。それを本書の末尾に掲載したので、併せ

て参照して頂きたい。

最後に、本書の執筆に当たり精神的支柱となった故大城フヂ様及び著者等の母福田邦子に対して、感謝の意を表わす。

本文中での敬称は、省略させて戴く。

平成元年12月

福田英一；CANADA, Ontario 州在住

福田雄二；日本，福岡県 在住

目 次

第 1 章	英語と日本語の比較	3
1. 1	文化形成の根本要素としての言語	5
1. 2	英語と日本語の構造と文法の比較	11
1. 2. 1	語順	12
1. 2. 2	重点	25
1. 2. 3	文法定義の基準	31
1. 2. 4	単語間の関係	67
1. 2. 5	主語, 述語, 目的語の関係	71
1. 2. 6	敬語	75
1. 2. 7	まとめ	76
第 2 章	言語の影響	83
2. 1	人間の発想や思考に与える影響	85
2. 2	マネジメントに与える影響	106
2. 3	文化一般に与える影響	142
第 3 章	言語の違いを超えて	181
3. 1	部分志向と全体志向の調和の意義	183
3. 2	思想と言葉	196
3. 3	日米の国際化	199

参考論文

1. Capitalism vs. Relationism :

Why Western Theories Cannot Apply to Japan207

2. Language :

A New Dimension of Management213

参考文献一覧237

図のリスト

図 1 名詞のシステム

図 2 冠詞のシステム

図 3 英語と日本語の比較

図 4 英語と日本語の語順と重点の対比

図 5 英語と日本語の重点の対比

図 6 英語と日本語の文法情報の対比

図 7 人間の思考パターンに対する英語と
日本語の影響の対比

図 8 日米グループ形成のパターンの対比

図 9 日米資本構造の定義の対比

図10 日米の経営管理法と経済システムの対比

図11 部分志向と全体志向の対比

図12 性と言語と年齢の思考パターンに及ぼす影響

第 1 章 英語と日本語の比較

1. 1 文化形成の根本要素としての言語

著者等は、日本と北米での会社勤務と生活体験を通して、まず国民性の違いを痛感した。その都度、言語に関する何かが、その背後に潜んでいるのではないかと、直感的に問題意識を持った。そして、1981年辺りから、北米と日本の経営法の違いの謎について考えると同時に、言語にも留意しながら研究と思索を続けた。1983年、この謎を解く鍵が見え始めた。つまり、英語と日本語の対比が、北米と日本の経営法の対比と似ているのである。この英語と日本語の文法や構造の比較については、次節で詳しく述べる。経営法の違いについては、既に多くの本が書かれているが、第二章で言語の対比と照らし合わせながら、経営法の対比について考察する。

経営法は文化の一部である事、そして著者等の二つの会社での経験と観察から、言語の対比は文化と思考パターンにも当てはまると確信した。その間、同様な点を一般的な意味で示唆する本に出くわし始めた。著者等は言語学の専門家ではないので、アイデアが先に出て、専門書によるその確認が追い付くという研究パターンがしばらく続いた。これらの中で、特筆すべきはエドワード・サピアとベンジャミン・リー・ウォーフである。彼等の提唱する言語的相対性論 (Linguistic Relativity) は、重要な仮説である。この二人に先駆者のフランツ・ボアズを加えた三人の米国の学者（但しウォーフはエンジニア）は、アメリカ・インディアンを研究し、今世紀の前半に、言語と文化及び人間の思考法や世界観の相関関係を主張した。言語的相対性論とは、「人間の思考法や世界観は、言語の文法や構造等の体系に基づく概念に依存し、異言語間では相対的である。」

という主張である。本書の最大のテーマは、英語と日本語の相対性の証明と、それに基づく言語的相対性の仮説の証明に在ると言ってもよい。

他にも様々な分野の学者が、同様な考えを提唱している。例えば、哲学者のルドヴィク・ウィトゲンシュタインやエルンスト・カシラー、考古学のクロード・レヴィ・ストラウス、言語学のロマン・ヤコブソン、心理学のジャン・ピアジェ等がその代表的な学者である。

『言葉と文化』の中で著者群の一人本名信行は、古くさかのぼれば18世紀から19世紀にかけてのヨハン・ゴットフリート・フォン・ヘルダーやウィルヘルム・フォン・フンボルト等の言語学者が始まりであるとしている。ウィトゲンシュタインについては後で語るとして、レヴィ・ストラウスとヤコブソンは、言語構造と社会構造の類似性を提唱した。フンボルトは、言語構造と世界観の関係を指摘した。カシラーは、人間の思考には文字や数式の様なシンボルが必要であると言った。しかし、これらのほとんどの研究は、ウォーフ等を除いて、一般的な観念論で、それを実証する具体的・包括的例は見当たらない。ウォーフにしても、包括的ではなく断片的な相対性の指摘が主である。言語的相対性を証明するには、二つの大きく異なる言語と文化を対象に研究しないと、明確な結論は導出しにくい。印欧語と非印欧語(例えば東洋言語)、及びそれぞれの文化を比較するのが、現実的に言って適切であると考えられる。この意味から、印欧語の範囲の枠から出たウォーフ等によって、言語的相対性論が生まれたのは当然だとも言える。世界の言語は、概ね下記の三つのタイプに分類される。

- (1) 孤立語：語尾変化・接辞(接頭語・接尾語)なし。各単語が一音節から成り、単語の文中での位置

が文法（文中の単語間の関係）の主たる役割を果たす。

一例：中国語

(isolating/monosyllabic language)

- (2) 曲折語：語尾変化が発達。この語形変化が文法の主な役割を果たす。

一例：印欧語

(inflectional language)

- (3) 膠着語：様々な付属的な単語（助詞・助動詞・接頭語・接尾語のような語）と語尾変化が文法の主な役割を果たす。

一例：日本語，韓国語，ウラルーアルタイ語
（蒙古語，満州語，トルコ語，ハンガリー語，
フィンランド語，等）

(agglutinative language)

近代の欧語は語形変化が簡素になり，前置詞が大きな文法的役割を果たすようになったと言われている。特に，英語がその意味で曲折語から孤立的な言語になった。

幸運にも，日本語と印欧語は語源的・文法的に掛け離れている。更には，極端に異なる文化も幸いして，少しずつ断片的なりにも言語の違いを指摘し，文化の違いと相関する努力はなされてきた。哲学者中村元の『Ways of Thinking of Eastern Peoples』，金田一京助の『日本語の変遷』，別宮貞徳の『日本語のリズム』，チャールズ・ムーア編集の『The Japanese Mind』，中島文雄の『日本語の構造』や『文法の原理』，鈴木孝夫の『Japanese and the Japanese』，林周二の『経営と文化』，沢田允茂の『言語と人間』，李御寧の『縮み

志向の日本人』、橋本進吉の『古代国語の音韻に就いて』、金田一春彦の『日本語』等が、著者等の知る限り、その代表的なものである。従って本書は、これらの先駆者の研究の延長とも言える。内容については、次節と次章の議論中に触れる。

「言葉は文化也」や「初めに言葉ありき」と言われるように、言語が文化や思考法に何らかの影響を与えている事は、容易に感知できる。ウィトゲンシュタインも『Philosophical Investigations』の中で、言語を教えるのは説明ではなく訓練であると言う。つまり、人間は幼少の頃から十代にかけて、身に付けた言語を通して、もっと正確に言えば言語の基盤的概念を通して、外部世界を見て思考するように訓練される。これが、人間の思考法、宗教や道徳を含めた価値観と世界観、そして集合的には国民性を形成することになる。これらを全て含めて、文化で総称する訳である。ウィトゲンシュタインは、絶対的な言語そして絶対的な世界観を否定している。要するに、異なる言語は、異なる概念に基づき、異なる世界観を強いる。そして、それらは多元相対的である。沢田允茂も最近の著書『言語と人間』の中で、言語を、宗教を含めた全ての文化の原点に位置付けている。本書も次章で同じ問題について考察し、同じ結論に達した。但し、一般に言語と文化を語る場合、個人レベルでの思考法、価値観、世界観には多少差が在り分布ができる。従って、文化を言語で相関する場合、文化はある社会の平均値に相当し、相関係数は決して100%にはならない。もし100%であるとしたら、その社会は事実上全体主義に冒されており、非常に危険で異常な状態である。

定量化は不可能であるが、文化が言語の影響を受けている事は確実である。しかし、他の多くの因子も文化に影響を与える点に留意せねばならない。この点は、第三章と関連する。江戸時代末までは、言語と文化が、西洋の影響のない概念で支配されていた。明治時代

以降は西洋の文化を徐々に受け入れ、現世代は英語教育も必須であるが故に、江戸時代と比べれば英語的思考をしていると思われる。ここまでの議論では、言語が一方通行的に文化を形造るという言い方をしてきた。その逆も又真である、と思われる例を挙げてみよう。明治維新は、その一例と考えられる。明治開国後、日本は西洋からの圧力を政治経済社会のあらゆる面で受けると同時に、江戸時代からの文化に基づく反発力がぶつかり合った。その時、西洋の影響を受け、横書きを取り入れたり、新しい言葉が作られたり(科学技術の専門語だけでなく、個人の権利、概念、理性等)、片仮名や英文字の使用の頻度が増えたりした。英語の関係代名詞「which」に相当する「○○するところの」のような直訳表現法は、恐らく、英語を通して西洋の近代技術を学ぶ以前には、あまり使われなかったと思われる。このようにして、西洋の新しい概念について学ぶ機会が増えた。

英語の例としては、英語から米語への変化についてヘンリー・メンケンが、『The American Language』の中で詳しく述べている。英語から米語への変化の外的圧力は様々で、例えば英国系移民者の本国に対する対抗意識から生まれたアメリカニズム運動、その一つはウェブスター等による綴りや発音の簡略化又は単なる変化、他にも欧州移民者の持って来た言語と文化の影響、原住民インディアンの影響等、により純英国語の基盤が薄れた。

以上の例は、言語構造や文法が大きく変わる程のものではない。21世紀へ向けての急速な国際化は、日本の歴史が始まって以来、最も重大な影響を日本語に与えると思われる。英語の歴史を眺めてみると、ケルト語・ラテン語・ゲルマン語・フランス語等の影響を受けながら、曲折語から孤立語に近い分析的な言語に変化した。独語も、古代から近代に至る間により論理的・分析的に変化したと言われている。カシラーは著書『The Philosophy of Symbolic Forms』

の中で、古代独語には時制が定義されていなかったと言う。恐らく、必然的に周囲のより論理的なラテン系言語の影響を受けたのではないかと考えられる。従って、長い歴史の間には、種々の内的及び外的圧力によって、単語だけではなく文法も変化し得ると言える。しかし本書での考察は、仏の言語学者フェルディナンド・デ・ソシュールが定義した共時的(synchronic)視点に基づく。即ち、歴史的背景と変化をあまり考慮せず、現代の英語と日本語の比較に基づく。更には、金田一京助が『日本語の変遷』で主張するように、「語法は長い歴史の間でも簡単にそして大幅に変化しない。」という前提にも基づく。